

同じ月を見ている

2005(平成17)年11月7日鑑賞〈東映試写室〉

★★★★



監督＝深作健太／原作＝土田世紀／出演＝窪塚洋介／^{エディソン・チャン}陳冠希／黒木メイサ／山本太郎／松尾スズキ／岸田今日子／三谷昇／川上将平（東映配給／2005年日本映画／106分）

……窪塚洋介が復帰第一作として選んだのがこれ。登場する幼なじみは、原作と同じだが、主人公はドンから鉄矢に移行……。抽象的なタイトルながら、準主役（？）のヤクザの男を含め、人間の弱さとその苦悩をわかりやすくアピールしてくれている。これなら、今ドキの若者も「人間の生き方」という難しいテーマと真正面から向きあえるかも……？

「幼なじみ」ってホントいいもの……

この映画では、当然鉄矢（窪塚洋介）、ドン（エディソン・チャン）、エミ（黒木メイサ）の3人が中心人物。

しかし、スクリーン上には3人の少年少女時代が再三登場するから、3人の子役たちの演技も重要。その点、エミのかわいい少女時代を含めて、3人の子役がそろって違和感なく演じているのは実にお見事！ かわいい女の子を「オンナ」と意識しないで、幼なじみ状態でつきあえるのは私の経験では小学校4年生くらいまで……？

しかし、早熟化が進み、セックス体験年齢が早まっている今の時代では、小学校4年生ともなれば女の子は立派なオトナで恋愛対象……？

それはともかく、この映画のテーマは3人三様の生きざま、とりわけ鉄矢とドンという男2人のそれだが、それを浮かびあがらせるための大切な伏線が、テッチャン、ドン、エミと呼び合っていた幼い頃の心の交流。幼なじみって本当にいいもの……。

あった、あった、こんな朝鮮人差別……

1949年生まれの私の小学生時代は、1950年代後半から60年代はじめにかけてから、日本が高度経済成長時代に突入する少し前。したがって、当時私はつぎのあたったズボンをはいっていたし、外食したりタクシーに乗ったりした経験は1度もない。正月や誕生日に母親が作ってくれるのり巻きが、普段考えられる最大のごちそうだったし、結婚式に行った父親がごちそうをお持ち帰りしてくれるのが最大の楽しみだった。

松山市に住んでいたそんな私の小学生時代には、私にもドンちゃんと同じような「立場」の友人が1人いた。彼は身体もでかく体力もあったが、なぜか仲間外れにされていたことを今でもよく覚えているが、その理由はきわめて明白……。

窪塚洋介君とは？

日本アカデミー賞を総なめにした行定勲監督の『GO』（01年）で、見事主演男優賞を射止めた窪塚洋介は、その後『ピンポン』（02年）、『魔界転生』（03年）と順調にキャリアを積み上げていった。しかし、この窪塚洋介を突然襲った悲劇が、2004年6月6日に発生した自宅マンション9階からの転落事故。これによってその生死さえあやぶまれた彼は、何とか九死に一生を得たが、当然その役者生命には暗雲が……？

彼は1949年生まれの私より30歳も若く、今26歳だが、その演技力は抜群！ しかしさすがにこの転落事故による2年間のブランクで落ち込んでいるのではと心配していたが、何の何のそれはとりこし苦勞……？

窪塚洋介君の復帰第1作

その窪塚洋介が自分の意思で選んだのが、土田世紀原作の『同じ月を見ている』。原作ではドンが主人公だが、映画では主人公をドンから鉄矢に移し、窪塚君はその難しい役柄に挑戦している。心臓に障害を持つエミを助けるために医者になるという単純な動機ながら、その努力ぶりは評価されるべきだし、今や研修医としてその将来は洋々たるもの。そのうえ、今はエミともすっかりいい仲に

……。これで鉄矢は大満足……？

しかし、人間の心はそれほど単純ではないから、映画は面白い……。ドンの刑務所からの脱走。そのことが、鉄矢とエミに与えた影響は……？

興味深いドンの人物像

ドンは鉄矢とエミの幼なじみで、小さい時から絵を描くのが大好きな少年だが、靈感ごっこの名人。つまり、人が心の中で考えていることを理解し、それを絵に描くことができるという異才をもった少年だ。しかし、両親のいない朝鮮人の彼は、鉄矢とは友達になれたものの、小学生時代はいつもいじめの対象で、時にはその仕打ちが鉄矢に及ぶことも……。すなわち、「鉄矢がドンをいじめなければ、鉄矢もいじめるぞ」という小学生ながら陰湿な作戦……。

なぜか鉄矢のほかに、エミの父親だけはドンのやさしさや絵の才能の理解者だったが、そんな状態で成人したドンは、普通ならさぞ世間馴れた、たくましくいけれどもイヤな人間に育ったはず。その1つの典型が、これも日本アカデミー賞を総なめにしたビートたけし主演・崔洋一監督の『血と骨』（04年）の主人公。

ところが、ドンはそれとは正反対に、幼い頃のやさしさと美しい気持をそのままって成長した珍しいキャラクター。そんなキャラクターとしてすぐに思い浮かぶのが、あのトム・ハンクス主演の『グリーンマイル』（00年）で黒人の大男マイケル・クラーク・ダンカンが印象的に演じた死刑囚。この映画におけるドンのキャラクターはまさにこの死刑囚と同じで、純粹無垢なもの。やはり、虐げられた人間たちの心の中にこそ善が宿るということなのかも……？

こんなドンは、今は刑務所の中にいるが、ある日ついに1人ここから脱走……。7年間も刑を務め、釈放される日も近い中、なぜ彼は今危険な脱走を……？ そこから始まるドンの生きざまに大いに注目しよう。

難しいドン役をあの陳冠希が…… エディソン・チャン

幼い頃は仲良しだったが、大人になるにつれて1人別世界に入らざるをえなくなったのがドン。このドンを、『インファナル・アフェア』（02年）で大ブレイクした陳冠希^{エディソン・チャン}が演じており、それがこの映画の1つの売り。しかし、このドン

役はこの映画では非常に難しいもの。なぜなら、この映画でのドン・セリフは極端に少なく、演技のほとんどは顔の表情や目によるアピールによらなければならないため。陳冠希は『インファナル・アフェア』では、キリリとしたカッコいい若者像を演じていたが、この映画では差別を受け、虐げられた若者像を。

彼の内面の怒りやエネルギーの爆発ぶりを示すのは、彼がお寺で描いた1枚の絵。高名な日本画家の東谷（岸田今日子）にそのスケッチを認められたドンは、住職（三谷昇）の世話のもとに自由に絵を描くことが許され、そこで描いたのがコレだ。そしてドンはこの絵を残して姿を消していった……。こんな複雑な内面を抱えたドンの人物像を、香港の若手No.1俳優がどこまで表現できているか、さてあなたの採点は……？

男2人女1人の関係は難しい……

男2人に女1人。こんな3人の関係（決して三角関係ではない！）がうまくいくことは、きわめてマレ。幼い時から心臓に穴があいていたため満足に学校にも通えず、そのため友達がいなかったエミを、鉄矢とドンが快く受け入れたわけだが、それはこんな美少女なのだから当然のこと……。しかし、大人になると、複雑な男女の気持ちが絡んでくるため、3人の関係が難しくなるのは当然で、ヘタすると男同士の「対決」という最悪のケースも……。しかし、鉄矢とドンの場合は、もともとあまりにも立場が違いすぎてただけに、その「優劣」は明らか。この映画のスタートは、そんな優劣がはっきりついた今の時代から。すなわち、鉄矢とエミの2人は今ベッドの中におり、将来の結婚も暗黙の了解という仲。これに対して、ドンは今刑務所から脱走したところ……。

ところが、これだけ優劣が明確となり、「勝ち組」と「負け組」に分かれているにもかかわらず、わからないのが女心というもの……。すなわち、エミがホントに心の中で求めているものはナニ……。そして、そんなエミを見てホントに鉄矢が求めているものはナニ……？

面白い部外者が約2人……？

鉄矢、ドン、エミの3人をメインとしたストーリーに、突如割り込んでくる部

外者（？）が、チンピラヤクザの金子優作（山本太郎）と美容外科医の中田（松尾スズキ）の2人。金子はぱったくりバーのマスターをしているらしいが、そもそも鉄矢、ドン、エミの3人の物語とは何の縁もゆかりもない人間……。

刑務所から脱走してきたドンが、絵を届けるためエミの自宅を探してさまよっていた時、これも酒に酔ってフラついていた金子とたまたま肩をぶつけ合っただけ。しかし人並みはずれた靈感を持つドンは、その後の金子の危険を予知したのか、金子が店に入っていくのをやめろと忠告したうえ、その後の金子の受難をなぜか一緒に受けることに……。こりゃ一体なぜ……？

金子にしてみれば、このドンの行動はそれまでの人生観や価値観を一変させるものだった。そんな「神の啓示」ともいえるようなショックを受けた金子の人生は以降一変し、ドンや鉄矢そしてエミとともに「同じ月を見る」仲間になりそうになったのだが……？

その金子の巻きぞえ（？）をくったのが中田。いくら医者でも当然専門が分かれているため、美容外科の先生に拳銃弾の摘出手術をやれというのは、あまりにも無茶な話であるうえ、もちろんそれは違法。

しかし金子が無茶苦茶なら、この中田もやけくそ。その結果、ドンの手術は成功したが、なぜかドンはここも黙って出ていくことに……。さて彼は何を目指して、どこへ行こうとしているのだろうか？　そして今は、鉄矢と一緒にドンの行く先を探す金子の運命は……？

黒木メイサの存在感は……？

こんな微妙な立場のエミを演ずる黒木メイサは、つかこうへい氏が見い出した、沖縄生まれのまだ20歳にもならない美少女。私は彼女をこの映画ではじめて見たが、その将来性が期待される女優であることはまちがいなし。しかし残念ながら、この映画での彼女の存在感は、今ひとつ……。それは、鉄矢とドンが必死に自分の生きる道を探しているのに対して、エミは「病気持ち」ということもあって、自らその生き方を制約しており、鉄矢のお嫁さんになるというくらいしか考えていないように思われて仕方ないため。これはもちろん、黒木メイサのせいではなく、役柄づくりのせいなのだが、この映画の脚本がエミの生き方を軽く位置づけ

すぎているのが少し残念……？

あなたは3つの火事をどう見る……？

この映画の物語と、鉄矢、ドン、エミ3人三様の人間性と生きザマを考えるについて、ポイントとなるのは3つの火事。第1は、ドンが1人住んでいた隠れ小屋の火事とそれを原因とした山火事。第2は、エミの別荘の火事。そして第3は、住職の孫の大樹君（川上将平）を巻き込んだ山火事。

この3つの火事をさてあなたはどう見るか？ あなたのご意見を聞かせてもらいたいものだが……。

タイトルは映画向き

この映画のタイトル『同じ月を見ている』は土田世紀原作のコミックと同じだが、このようなタイトルの場合、本よりも映画の方がうまく表現しやすいもの。月にも満月、半月、三日月といろいろな形があるうえ、夜中にくっきりと浮かび上がる月もあれば、昼間にかすかに白く見える月もある。そして同じ月であっても、それを見上げている人間の心はそれぞれバラバラで一致することはまれ……。

鉄矢とドンそしてエミの3人が、子供の時からいつも同じ思いで月を見上げていたのは例外であり、古き良き思い出にすぎないことは明らか。しかし心の弱い人間は、ホントはいつも同じ気持ちあの月を見上げていたいもの……？ そんな気持ちがうまく表現されたタイトルだが、それをまだ若い深作健太監督がスクリーン上に見事に表現しているのは、さすが父親譲り……？

2005(平成17)年11月8日記